

1998 6

1-



内田あぐり 氾 Fluxes

2024.4.27[±] - 6.23[日] 浜松市秋野不矩美術館

出品リスト/List of Works

- ・このリストは
- 出品番号、作品名、制作年、作品サイズ(縦×横)、 素材、所蔵・寄託情報を掲載しています
- ・所蔵について記載のないものは作家蔵です
- ・作品の展示順は必ずしも リストの掲載順ではありません

秋野不矩作品 Fuku Akino

1.

童女/Girl 1946年 49.1×52.5 cm 絹本着色 color on silk 浜松市秋野不矩美術館 Akino Fuku Museum

不矩の長女をモデルに描いている。戦後間 もない頃で時代や状況が大変だったにも関 わらず、瑞々しさと生気に溢れ、親の愛情、 子への優しい眼差しが心を打つ作品となっ ている。

2.

坐す/Sitting 1953年 95.0×114.2cm 紙本着色 color on paper 浜松市秋野不矩美術館 Akino Fuku Museum

裸婦をモデルにしているが、鑑賞的・趣味的な傾向を徹底して排し、硬質で力強い表現を目指している。表現方法では、特に明暗の対比のさせ方も一工夫加えている。不矩が大切にした対象の中にある美の本質的価値を引き出そうとする意志が本作から明確に感じられる。

3.

五月 / May 1953 年 91.8×61.5 cm 紙本着色 color on paper 浜松市秋野不矩美術館

Akino Fuku Museum

新緑のような美しい緑色で覆われた画面には、キンボウゲの花と共に、人の一生の中でも新緑期にあたる子供たちを配し、これから勢いよく成長していく生命的なエネルギーを温かな眼差しで描き切っている。

4.

女人群像
Woman in Traditional Clothing
1988年 160.0×160.0 cm
紙本着色
color on paper
浜松市秋野不矩美術館
Akino Fuku Museum

様々なボーズで並ぶ女性たちが身に着けているのは、アフリカやインド原産の藍染の布である。不矩はその信仰的な意味を持つ抽象的なデザインの力強さが好きで、その布をまとった女人の群れを試作したという。

5.

秋野不矩 素描・下図 Fuku Akino Drawings 1970–1990年代 サイズ可変 鉛筆、木炭、顔彩、色鉛筆、ペン、紙他 pencil, charcoal, pigments, colored pencil and pen on paper and others 浜松市秋野不矩美術館 Akino Fuku Museum

内田あぐり作品 Aguri Uchida

6.

亜里座像/Seated Ali
1983年 72.7×60.6 cm 岩絵具、墨、膠、雲肌麻紙 mineral pigment, sumi ink and animal glue on Japanese paper 神奈川県立近代美術館 The Museum of Modern Art,

Kamakura & Hayama

娘の亜里が小学校に入学することを記念して描いた作品。内田あぐりが6歳の時に着ていた晴れ着を娘に着せてモデルをしてもらい、ドローイングをした後に日本画で表現している。

7.

女人群図—II / Female Figures—II
1975年 207.0×289.0 cm
岩絵具、墨、膠、雲肌麻紙
mineral pigment, sumi ink and animal
glue on Japanese paper
神奈川県立近代美術館
The Museum of Modern Art,
Kamakura & Hayama

大学院修了時に描いた《女人群図-I》と本作が第2回創画会賞を受賞した作品。人間の肌は胡粉という日本画白色顔料の上に墨の「垂らし込み」という古典技法を用いて、人間の精神的な陰影を表現している。着物は内田の母親が娘時代に着ていた着物の端切れを見つけたことからイメージが生まれ、女性達の着物を描いている。煌びやかな着物は粉飾された現代社会を象徴し、時代と共に逞しく生きる女性たちを描いている。

8.

私の前にいる、目を閉じている
In Front of Me, Closed Eyes
2007年 240.0×240.0 cm
岩絵具、墨、膠、楮紙、布、紙縒、雲肌麻紙
mineral pigment, sumi ink, animal
glue, kozo-paper, cloth and twistedpaper string on Japanese paper
平塚市美術館寄託
On loan to
The Hiratsuka Museum of Art

1990年代以降、人体表現は顔や腕、足もないトルソになり、人体そのものへ奥深く追求している。画面向かって右のトルソは、一度描いた人体の上に楮紙でフォルムを作り、紙縒で楮紙を縫うことで、人体の解体

と再生を表現している。左下の裸婦は日本画の古典技法である「白描」で描いている。 余白に存在する唐草文様は、生命を象徴している。膠で溶いた日本画絵具は柔軟性があり、絵具を塗る、ペインティングナイフなどで削るという行為を繰り返しながら、 人体の不可視なリアリティに迫っている。

9

带水層 / Aguifer 2021年 112.0×145.5 cm 岩絵具、顔料、墨、楮紙、紙縒、膠、 雲肌麻紙

mineral pigment, sumi ink, animal glue, kozo-paper and twisted-paper string on Japanese paper

粒子状の地層の隙間に地下水が潜在的に存在している構造を帯水層という。本作は、人体と自然との隙間、時間的な隙間・ギャップ、人間関係や人間を取り巻く様々な隙間までを包含している。対象を解体し、紙縒や楮紙を用いたコラージュにより再構成した作家の内なる形象を具現化しようとしたかたちでもある。

10.

ロマノフの海/Sea of Romanov

1984年 205.3×230.0 cm 岩絵具、墨、膠、雲肌麻紙 mineral pigment, sumi ink and animal glue on Japanese paper 福島県立美術館

Fukushima Prefectural Museum of Art

パフォーマーであった古澤栲 (1947-2018年)をモデルに描いている。彼の晩年は「首くくり栲象」として、自分の庭の柿の木で毎日首を括るパフォーマンスを行う「庭劇場」を開催し有名であった。詩人で劇作家の芥正彦氏が古澤栲の身体表現を見て、まるで君はロマノフの海のようだ、と言われたことを古澤栲から聞き、その言葉に魅了されて作品が生まれた。この頃から男性像をモデルに表現することが多くなり、身体の根源的な造形を追求している。

昨年、福島県立美術館コレクション展に展示された際に、福島の高校生による詩が添えられた。絵を見ることから生まれる高校 生達の率直な言葉は美しく、本展でも傍らに添えている。

11.

ロマノフの海のためのドローイング Drawing, Sea of Romanov 1984年 68.0×76.0 cm 鉛筆、紙 pencil on paper

古澤栲をモデルにドローイングをした作品。 このドローイングが《ロマノフの海》の下 絵となっているが、ドローイングの前には 何枚も小さなエスキースをして構想を練っ ている。同時期の古澤栲を描いたドローイ ングは、現在の内田の作品の中にフォルム を変えながら時折登場をしている。

12.

残丘一あくがれ

Inselberg—Drifting

2019年 783.0×194.0 cm
岩絵具、墨、膠、楮紙、布、紙縒、雲肌麻紙
mineral pigment, sumi ink, animal glue, kozo-paper, cloth and twisted-paper string on Japanese paper 神奈川県立近代美術館
The Museum of Modern Art, Kamakura & Hayama

家の傍らを流れる川をテーマに数年前から描いている。川は6月になると数日間だけ緑色に変わることがある。水中の藻がいっせいに繁茂するのだろうか、まるで女性の長い髪の毛が川面を揺らいでいるような、人体の器官がイメージされ、不思議なフォ

ルムで満たされている。川はエメラルドグ リーンやインディゴに染まり、時折、川の 主だろうか、金色の大きな蛇が縫うように 這っている。人体の有機的なフォルムと共 に、水の流れに生まれる生命の循環を表現 している。

13.

川面一I/River Surface—I 2024年 90.0×128.0 cm 顔料、墨、朝鮮黄土 (ファント)、膠、 阿多古和紙 mineral pigment, sumi ink, Korean red

clay and animal glue on Atago-paper

14.

川面一II/River Surface—II 2024年 90.0×128.0 cm 顔料、墨、朝鮮黄土 (ファント)、膠、 阿多古和紙 mineral pigment, sumi ink, Korean red clay and animal glue on Atago-paper

15.

川面―III / River Surface — III 2024年 88.0×35.0 cm 顔料、墨、朝鮮黄土 (ファント)、膠、 阿多古和紙

mineral pigment, sumi ink, Korean red clay and animal glue on Atago-paper

浜松市天竜区阿多古地区は、江戸時代から戦前まで「阿多古和紙」の生産が盛んであった。本作は、阿多古和紙最後の職人といわれる大城忠治氏から紙を入手し、川面の表情を描いた作品である。「大城さんの紙は思いのほか強靭で、描いている最中でよく暴れて手に負えないことがある。それでも、紙の性質に身を委ねてみると、紙そのものが水の道をつくり、顔料がそこに流れていくのである。——(中略)——大城さんの紙は、素材と表現することへの原初的な営みをあらためて私に教えてくれたようである」(本展記録集より)

下地の絵具は朝鮮半島の南端、麗水(ヨス)を訪れた際に採取した赤い土、「ファント」 (朝鮮黄土)であり、自ら絵具に精製している。ファントは朝鮮半島の人々の歴史と生活にある土と色である。

16.

氾/Fluxes

2024年 各146.0×35.0 cm 三幅対 顔料、墨、膠、雲肌麻紙 mineral pigment, sumi ink and animal glue on Japanese paper

本展のために秋野不矩の故郷、浜松市天竜区を取材し描いた新作。3つの川の流れを描いているが、橋梁から川を俯瞰することによりイメージされた『天から地にあふれ落ちながら注ぐ水の川』を表現している。三幅対とは、古くから東洋にある絵画様式であり、3枚で1つの作品として見る。

17.

分水界/Watershed 2020年 180.0×800.0 cm 岩絵具、顔料、墨、膠、楮紙、紙縒、 雲肌麻紙 mineral pigment, sumi ink, animal glue, kozo-paper and twisted-paper string on Japanese paper 横須賀美術館

Yokosuka Museum of Art

2020年、原爆の図丸木美術館へ訪れた際に見た傍らを流れる都幾川の光景から着想を得ている。前年に襲った台風により、川の下流は氾濫し、大きな被害を受けた。激しい水流の痕跡と、うねるような流砂のフォルム、地面の深い亀裂は剥き出しの大地のように、自然の原初的な骨格を見せてくれた。循環する水の中でいくつもの生命が繰り返し出現し、元の場所へ帰っていく

生命の根源的な存在を表現している。

18.

河/River

2018年 162.0×390.0 cm 岩絵具、顔料、墨、楮紙、紙縒、膠、 雲肌麻紙 mineral pigment, sumi ink, anim

mineral pigment, sumi ink, animal glue, kozo-paper and twisted-paper string on Japanese paper

緑色を基調とする河海の中に漂う人やいのちの気配。絵画表現の本質と人間存在の意味を探りながら多次元的空間世界を表現している。人間の身体を自然現象へと還元させ、普遍性の高い自然観へと深化させている。本展では3枚組の変則的な屏風様式として展示している。

19.

夜の人/The Night Fly 2022年 45.5×53.2cm 岩絵具、顔料、膠、墨、雲肌麻紙 mineral pigment, sumi ink and animal glue on Japanese paper

夜の森の中で、水辺にうずくまる小さな人間のようなものが画面左下に描かれている。深い闇と共にある人間の孤独を、藍色や濃緑色、墨で表現をしている。この作品は従来の接着剤である膠とアートレジンという樹脂膠の併用により、両者と水が反発することで生まれる新しい「垂らし込み」技法の表現を試みている。

20.

ドローイング/Drawings

1975-2024年 サイズ可変 鉛筆、木炭、コンテ、水彩絵具、紙 pencil, charcoal, conte and watercolor on paper

素描やドローイングは一期一会である。その時にしか見ることのできない原初の線やフォルムがあり、そこには、生涯で一度しか出会うことがない偽りのないわたしの人間像、そして風景がある。(内田あぐりドローイング集のテキストから抜粋)

21.

ながれ I/Flux I 2022年 180.0×66.0 cm 岩絵具、顔料、墨、楮紙、膠、雲肌麻紙 mineral pigment, sumi ink, animal glue and kozo-paper on Japanese paper

22.

ながれ II / Flux II 2022年 66.0×180.0 cm 岩絵具、顔料、墨、楮紙、膠、雲肌麻紙 mineral pigment, sumi ink, animal glue and kozo-paper on Japanese paper

川や水辺の風景に魅せられて、川に生まれるフォルム、循環する水を作品化している。これらの作品は日常的に見つめている家の傍らを流れる川からイメージしている。川は6月頃に緑色の藻のフォルムで満たされることがある。藻が緩やかな水の流れと一体化するように、流動的で様々な形に変容をしながら、有機的なフォルムを生み出している

資料 Materials

秋野不矩と内田あぐりの画材 Painting Materials of Fuku Akino and Aguri Uchida

土、岩絵具、墨、硯、膠、筆、色鉛筆他 natural soil, mineral pigment, sumi ink, inkstone, animal glue, Japanese brushes, colored pencils and others